



牛に薬品を投与して寄生虫を予防する。研修が始まってから、村では牛の死亡率が見違えて下がった



村おこしセンターで、風にはためくボリビアと日本の国旗。このプロジェクトは現地のコンサルタントがコーディネートしており、日本人専門家などが常駐しているわけではないが、日本やJICAへの強い感謝の思いが感じられた

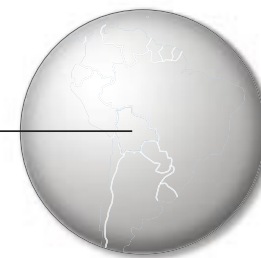
村人は伝統的な民族音楽を演奏して私たちの訪問を歓迎してくれた



# FIELD SKETCH

## 孤立したアチャカチ地域の村おこし

人口の半数以上を先住民族が占める南米ボリビアは、かつてスペイン人に征服された歴史を持つ。今年1月、独立以来初の先住民族出身の大統領が誕生したが、それまで反政府運動が活発で、中でも民族意識が強く、政府による開発が遅れていたのがアチャカチ地域。そこで今、JICAの支援で「村おこし」が進んでいる。



ボリビア  
BOLIVIA

### 標高4000メートルで暮らす人々

朝7時半に首都ラパスを出発し、標高約4000メートルのアルティプラノ（高地平原）を車で走ること約2時間、左手前方に青く輝く湖面が見えてきた。チチカカ湖だ。琵琶湖の12倍もあるこの湖はボリビアと隣国ペルーにまたがり、私たちが目にしているのは、ボリビア側のほんの先端の部分だという。右手には万年雪に覆われたアンデス山脈がそびえている。

チ地域に向かっていた。ここではJICAの技術協力プロジェクト「アチャカチ地域振興計画」が行われている。アチャカチ地域には45の集落があり、先住民族アイマラ族が農牧業を営んで暮らしている。自給・換金作物としてジャガイモやソラマメ、タマネギなどを栽培しながら、牛や羊を飼い、乳・チーズなども生産している。年間収入は約4500ボリビアノス（約6万6000円）。ボリビア政府は農村部の貧困緩和を目指して、1990年代から住民参加型の農村開発を推進し、農業生産の向上と生活基盤の整備に取り組んできた。JICAもそれを支援するため、96

97年に調査を実施し、アチャカチ地域の農業開発計画を提案。さらに99〜2003年、その計画に基づいて灌漑施設の改善や道路網の改修、畜産改善のための機材、ラパス県が建設する村おこしセンターの機材を支援する無償資金協力が行われた。しかしその後、農家の生産性・収入の向上や生活改善につながるような技術支援を、ラパス県が十分に行うことができなかった。そこでJICA



縫製教室で作った作品を見せる村の女性たち。「スペイン語を勉強したいという女性が多く、今後、識字教室も始めたい」と蔵本所長



は、3つの村おこしセンターを拠点に、ソ  
ラマメ生産の改善、畜産振興、女性の職能  
研修、保健衛生向上に重点を置いた、総合  
的な農村開発「アチャカチ地域振興計画」  
を05年4月に開始した。

### 村おこしセンターを活用した村落開発

最初の訪問地、チャチャコマニ村の村おこ  
しセンターに着くと、たくさんの村人たちが  
にぎやかな民族音楽と花吹雪で歓迎してくれ  
た。チャチャコマニ村は、アンデス山脈から  
チチカカ湖へ流れるケツカ川の上流域にある。  
センターでは、若者向けのコンピュータ  
教室、主に女性を対象とした裁縫教室、種子  
や肥料、薬品などの販売、ソラマメの試験栽  
培、農業・酪農の研修などが行われている。  
センターの運営・管理は、チャチャコマニ村  
を含む上流域の集落の住民によって組織され  
た運営委員会が担っている。委員は6人、2



ペレン村のセンターで作られたチーズ。村人は自宅で作った牛乳を持参して、乳製品を作る技術を学ぶ

年間の任期  
だ。運営や研  
修の費用は、  
住民の積立金  
で賄われてい  
る。

コンピュー  
ター教室には

5台のコンピューターが並べられ、その前に  
15人ほどの若者が座っている。3人で1台を  
共有しながら、基本的な操作を学んでいるよ  
うだ。運営委員会のブルーノ委員長が「教室  
は、高校生、青年、大人の3グループごとに  
週2回、3時間開かれていた。みんな、コン  
ピューターを触るのも初めてだが、使い方を知  
っている」と町で就職するチャンスになる」と  
説明する。青年の一人は「プログラムを終  
えると修了証明がもらえる。それでいい仕事  
を見つきたい」と話す。

裁縫教室は女性たちでにぎわっていた。こ  
ちらは毎週土曜日に開かれ、ミシンや編み物、  
縫製などの技術の研修が行われている。セー  
ターなど作った衣服は、家族で使用するだけ  
でなく、村で売っているという。女性グルー  
プのリーダー、フリアナさんが「技術を学ん  
で品質のよいものを作り、販路を拡大して収  
入向上につなげたい」と意気込む。

一方、施設の外の試験栽培場では、ソラマ  
メ栽培の講習会が行われていた。県庁から派  
遣された技術者のエリベルトさんが村に住み  
込み、集落ごとの農民グループに講習会を開  
いたり、農家を訪問したりして、ソラマメの  
質・量を改善する栽培技術を教えている。ア  
チャカチのような高地で作られるソラマメは  
品質が良いため需要が高く、輸出業者も買

いた。聞くと、病虫害の症状などを書いてお  
き、受講者に覚えさせるのだという。  
また、センターにはヨーグルトやチーズな  
ど乳製品の加工施設も設置され、商品開発や、  
村の女性を対象に加工技術の研修が実施され  
ている。ここで作られたヨーグルトを試食す  
ると、日本の製品にも負けないほどおいしい。  
「地域の物産展で一等賞をとったことがある」  
と村人も誇らげだ。いろいろな種類の乳製  
品を開発し、ラパスで販売できるようマーケ  
ットを探しているところだという。

県庁の技術者とともに、牛の寄生虫の検査や、  
寄生虫を予防する薬品の投与、体重を増やす  
ビタミン剤の投入、品種改良のための人工授  
精などの技術を、農民たちに教えている。薬  
品を投与するようになってから、牛の死亡率  
が見違えて下がっているという。こうした畜  
産技術を向上することで、牛乳生産量の増加  
が期待されている。  
センターの中にはヘルスポスト（診療所）  
があり、ラパス県庁から派遣された医師が女  
性や子どもの健康診断を行っていた。医師に  
よると、特に子どもの虫歯と大人の目の炎症  
が多いそうだ。ここで治療できない患者はラ  
パスの病院に送られる。  
3つ目の村おこしセンターは、下流域のペ  
レン村にあった。ここでも、下流域集落の住  
民を対象に、ソラマメなど野菜の栽培技術や  
酪農技術の研修、裁縫教室などが行われてい  
る。

研修用のソラマメ畑には、スペイン語で何

が書かれたカードがところどころに置かれて  
いた。聞くと、病虫害の症状などを書いてお  
き、受講者に覚えさせるのだという。  
また、センターにはヨーグルトやチーズな  
ど乳製品の加工施設も設置され、商品開発や、  
村の女性を対象に加工技術の研修が実施され  
ている。ここで作られたヨーグルトを試食す  
ると、日本の製品にも負けないほどおいしい。  
「地域の物産展で一等賞をとったことがある」  
と村人も誇らげだ。いろいろな種類の乳製  
品を開発し、ラパスで販売できるようマーケ  
ットを探しているところだという。  
センターに集まっていた村人たちは「自然  
条件が厳しい高地の農業は楽ではない」「昔と  
比べて雨の降り方や量、気温の変化がおかし  
い」「子どもたちは学校を卒業しても、村には  
仕事がないので町に出て探すしかない」と  
口々に問題を語り、だからこそ、技術力を上  
げるさまざまな研修をやってほしいと訴える。

蔵本所長は「ボリビアの先住民族は今なお



衣服を作る村の女性たち。品質の良い製品を作って販売し、収入向上を目指している



研修用のソラマメ畑で栽培技術の講習を受ける村人たち。高地でとれるソラマメは品質が良く、日本に輸出されるものもあるという

(上)日本の支援で建てられたチャチャコマニ村のセンター。日本の公民館のようなところで、たくさんの村人が集う  
(下)コンピューターの操作を熱心に学ぶ若者たち。受講者の中には1時間歩いて通う人もいたという

スペインの征服者に激しい怒り  
を抱いている。特にアチャカチ  
地域の人々は白人政府への不信  
感が根強く、ラパス県としても  
村落開発が進めにくかったため  
貧しい人々が多い。こうした孤  
立した地域でJICAが支援を

貧困の背景には、過酷な自然環境だけでな  
く歴史や文化などその土地特有の事情が絡み  
合っている。貧困削減とは、単に現金収入が  
向上すればいいということではなく、地域が  
安定して発展していくための基盤をつくるこ  
と。その道筋を開く支援もJICAの重要  
な役割なのだろう。

